

マガール 民族楽器のいのち

カイジャリの響き

深夜、浅い眠りから覚めると、「タッ・タラー、タッ・タラー」という乾いた太鼓の音が遠くから聞こえてくる。今日もどこかの村で歌垣をやっているなと思いつつ、私はまたうつらうつらと眠りにつく。

こゝは、ネパールのマガールという人びとが暮らす山村である。このあたりでは、未婚の女性たちが隣村の男性を招いて、歌い、踊り、飲み明かす歌垣がしばしば催される。そこでは、マガール語でゴホロと呼ばれるベンガルオオトカゲの皮を張った片面太鼓、カイジャリが用いられる。遠くの村から歌声までは聞こえてこない。だが、カイジャリの音は谷や尾根を越えて寝静まった村むらにとどく。

カイジャリの演奏はマガール人男性のたしなみのひとつであり、未婚の男性はほぼ全員、自分の太鼓をもつ。彼らは手の平と指を使い分けてそれを叩くことで、さまざまな音を生み出す。冒頭の「タッ・タラー、タッ・タラー」もそうだが、ほかにも「トゥク・トゥナ・トゥーン」といったよ

うに、人びとは音の違いとリズムを口真似で覚え、伝えてきた。カイジャリ独特のこうした乾いた、はじけるような音は、ベンガルオオトカゲの皮でなければ出ないといわれている。マガールの人びとはこの音色を愛してやまない。だから、ネパールの他の地域で見られる、ヤギの皮を張った片面太鼓(タンフー)にはまったく関心を示さない。

トカゲと人びとの来し方行く末

カイジャリにはベンガルオオトカゲの胴部分の皮が使われる。そのため、捕まえるときには皮を傷つけないように鉄砲を使わない。また、それだけを探しにわざわざ狩猟に出かけることはない。偶然見つけたら、^①遮二無二追いかけて尻尾を捕まえ、棒で頭部を殴って捕獲するのだ。私が一九八七年に譲ってもらったカイジャリは、胴面の直径が二七センチメートルある。つまり、それは胴回りが三〇センチメートルくらいあるベンガルオオトカゲから作られていることに

南真木人

(みなみまきと)

民族社会研究部

もつとも、最近の若者が使うカイジャリは明らかに直径が小さくなってきている。それは近年、ベンガルオオトカゲの生息数が減少し、大型のものが少なくなってきたためであろう。そもそも私は、いまだかつて森でこの動物に出くわしたことがないのだ。それでも、細々と生息していることは間違いない。捕獲された瀕死の状態のそれや、軒下に干された皮をこくまれに見かけるからである。

この地域のマガール人男性をマガール人足らしめてきた、カイジャリ演奏という伝統と、そのためにだけ捕獲されてきたベンガルオオトカゲ。はたしてどちらが先に、変化ないし絶滅してしまうのであろう。ベンガルオオトカゲの行く末は、月明かりのもと歌垣に興する男女の情景や、その響きを子守唄のように聞いて育つマガール人の子どもの将来に大きくかかわっているからである。



カイジャリ製作用に干してあったベンガルオオトカゲの皮



なる。黒い斑点がある美しい皮は、一五本の木の釘で、ろくろを挽きで作った木製の太鼓の胴にビーンと張られている。

頭部を殴られ瀕死状態のベンガルオオトカゲ



村内の未婚男女がおこなうカジュアルな歌垣



歌垣の休憩のあいだに子どもがカイジャリ叩きの練習をはじめ



カイジャリを叩き、歌うマガール人男性

ベンガルオオトカゲ

(学名: *Varanus bengalensis bengalensis* Daudin 1802)

オオトカゲ科オオトカゲ属のひとつの種。同じ属にはコモドオオトカゲなど31種がある。ベンガルを冠するがその生息域はイランから東南アジアの大陸・島嶼部に広がる。体長は約1~1.5メートルに達し、体重は2~3キログラムになる。主にカブトムシ、カタツムリ、アリなどの昆虫を食べる。ワシントン条約の付属書Iに載っており、今すでに絶滅する危険性がある生き物として、商業のための輸出入が禁止されている。